広野文芸欄

広野町弥生句会

季題　当季自由句

畑打ちの鍬を杖にし休むのも　遠藤健太郎
よもぎ摘むかの家は娘生れけり
春疾風家つきぬける音たてて

荒東風の家路に急ぐ老夫婦　鯨岡　一生
水ぬるみ魚の影も二つ三つ
山並みにわけへだてなく春の月

日向いの湧水沢に芹を摘む　根本　山水
雪蛍尻重たげに飛びにけり
水温み鶺鴒河原渡り行く

うす氷車にわれる音のして　山田　基星
鬼は外孫のまく声ひびきけり
孫二人お風呂に急ぐ春の宵

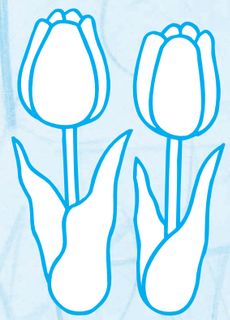
昨日とは違う山なり春立つ日　塩　史子
白鳥の引きしつづきし夜明前
野良の人日毎に増えて春近し

ふりしきる雪の合間に咲く椿　阿部　真生
荒海の波にゆられて鴨の群
凍てし野もひと雨ごとの暖かさ

渓流の音戻り来て山笑う　西　山　子
病院を出れば街の灯冴返る
春泥を引きづつてゐる児の歩み

ごうごうと吹く風の中春ありて　酒井　津祢
落葉して城山の碑は勿然と
籠りゐし日々共にせし寒椿

余寒なお心にしみて老の家　宮下　純子
薄氷の小川に人さし指ふれぬ
春待ちし老いら集いて湯治宿



広野みなづき短歌会三月詠草

（旧仮名使用　五十音順）

春めきて母の好みし蕗のとう生家の倉の
ほとりなつかし
今はなき母をしのびて一人摘むふきのと
うにも想ひよせつつ
のどかなる故郷の裏山眺めをりうぐひす
の声若くきこえる　猪狩ユリ子

冬山の白一色に点々とスキーヤーの服色
あざやかに
冬期五輪外地の人にくらべれば日本選手
の動きはがゆし　小澤　健次

珍らしくはやり風邪などひきし夫ボソッ
と言ひぬ「鬼のかく乱」と
風邪に臥す夫は感染案ずるも予防注射の
効を信じぬ
寝られぬままに聴きゐし英語ニュース音
調やさしく眠りへ誘はる　木村ミヨ子

春うららむせるが如の花の庭妻の好んだ
すぐり芽生えぬ
室内は十五度までに温もりてラヂオ体操
六十路に卓す
寒戻る予報に見入る如月に重いコートを
引きずり歩む　菅原　泰郎

あたたかなストーブの上のやかんから湯
気の音する店番の部屋
小春日に歩いてみれば公園の桜の枝の花
芽大きく　田副　耕一

逢ふ度に優しき言葉かけくれし兄を恋ひ
つつ墓に香たく
咲き初むる黄色浮き立つ福寿草春呼ぶご
とき庭の陽だまり　新田　里子

ホテル出て左に曲る片隅に人待ち顔にお
でんの屋台
信号の向ふは都会のネオン街見つつ食み
をり屋台のオデンを
生涯に最初で最後の屋台かも湯気立つ
竹輪　白滝　熱燗　山内　洋子

早春の光さし添ふ丘上の馬場にのどけし
黒鹿毛二頭
おほどかに歩む一頭に添ふ一つ争ひのな
きものの安けさ
黒かげの毛並にそよぐ若葉風心よげなる
歩みを見つむ
産みたての卵のような幸せを欲しと言ひ
たり吾もうなづく
もう少し若かったらと思ひつつ夕映美し
き西空仰ぐ
「いつか去る世」とふ歌に出会ひてやや
しばし深き想ひに目つぶりてをり
山墓地の小藪に枸杞の実は熟れて吾が足
音に小鳥飛び立つ　山口　歌子